

津久見中央病院でのこの1年間は、とても楽しくあっという間でしたが、私にとって貴重でかけがえのない経験で、多くのことを学び、実感することができた1年間でした。

津久見中央病院は津久見市内で唯一の入院可能な施設であり、地域医療に対する強い意識と実践があることを感じました。病院のスタッフのみでなく医師会の先生方とも連携しながら地域医療を支える姿勢は、私にとって大きな刺激となり、医師としての責任感を強く感じさせる経験となりました。一方で、スタッフの数や医療資源が不足しているため、患者さんの状態によっては、大分市や佐伯市の病院に紹介しなければならないことも多々あります。しかし、紹介した患者さんが遠方にある病院に移動するために治療が遅れることもあるため、できる限り地元で治療を完結させる努力が求められます。そのためには、限られたリソースを最大限に活用し医療の質を保ちつつ、地域医療の特性を活かした柔軟な対応が必要であることを学びました。

患者さんとのコミュニケーションのなかでも多くの学びがありました。初めは症状を聞くことに集中していましたが、次第に患者さんの話全体に耳を傾け、その人の生活や不安、希望を理解することが治療にとって非常に重要であることに気づきました。患者さんが自分の思いをしっかりと伝えられるような関係を築くことが信頼関係を深め、治療の成果にもつながるということを実感しました。また、病気の治療を終えてもこれまでと同じような生活に戻れず、介護サービスの利用や施設入所を余儀なくされることもあります。このような問題に直面した際、医師としては治療だけでなく、退院後の生活を見据えた支援が必要であり、医療だけでは解決できない問題に直面することもありました。医師としてできることは限られていることを痛感し、社会福祉士や看護師、ケアマネージャーなど様々な職種との連携が不可欠であると強く感じました。

医師としての自己成長も大きなテーマでした。日々、患者さんの症例を通じて新たな知識や技術を学ぶ一方で、自分の知識が不足していると感じることも多々ありました。その度に先輩医師やスタッフに相談し、アドバイスを受けることで、専門知識だけでなく、医師としての態度や考え方も成長できたと感じています。医療は日々進歩しており、常に最新の知識を取り入れ続けることが求められます。この1年間で得た経験をもとに、今後も学び続ける姿勢を大切にしたいと思います。

津久見中央病院での1年間は、初期研修を終えたばかりの自分が医師としての基礎を築き、さらに多くの実践的な学びを得ることができた貴重な時間でした。今後も目の前の患者さんのためより良い医療を提供することができるよう、日々努力を続けていきたいと思えます。

この場をお借りしてこの1年間様々なご指導ご支援をいただきましたことにお礼申し上げます。

「本当にありがとうございました。」

令和7年3月
内科 山本 卓哉